

自著と  
その周辺

## なぜアーティストは生きづらいのか？ —個性的すぎる才能の活かし方—

著者：手島将彦， 本田秀夫

リットーミュージック  
2016年4月  
定価：1,500円+税

人類の進歩の歴史の裏には、時代ごとに既存の概念や常識を覆す「規格外」の人の存在が必ずある。その反面、多くの人は、自分とは異質なものに対して本能的に不安や恐れを抱く。個性の強い人たちは、凡人にとって脅威、嫌悪、軽蔑、排除の対象となりやすい。古来、自分と異なるものを嫌悪する人たちは、どこの国にも必ず存在してきた。とくに近年、人種、民族、宗教などにおいて自分たちと異なる人たちの排除を志向する人たちの台頭が、世界各国で一斉に生じている。移民によって立国したはずの米国ですら、ヨーロッパからの先住民の支持を得た大統領が選出され、異質なものへの風当たりを強めてきていることも、その一環といえる。

精神科医療では、社会の多数派から排除されやすい人たちや、多数派の文化に馴染めず疎外感、孤立感を味わっている少数派の人たちを対象とすることが多い。筆者が専門とする発達障害の人たちもまた然りである。筆者は、発達障害の臨床と研究を行うとともに、いくつかの発達障害に関する啓発書を出版してきた。その中の1冊に、以前に本欄でご紹介させていただいた「自閉症スペクトラム—10人に1人が抱える生きづらさの正体—」(SB新書, 2013)がある。

本書は、「自閉症スペクトラム」を読んで触発された音楽学校教師の手島将彦氏と筆者との対談録に、若干の加筆を行ったものである。手島氏によると、音楽などアートの領域は、本来は他と異なる強い個性こそが価値のあるものとみなされるべきであるにもかかわらず、あたかもサラリーマン社会と同様の礼儀やしきたりが幅を利かせており、せっかくの個性が潰される危険すらあるという。巨大ビジネス化とともに、レコード会社が契約の際に評価するのは才能よりも協調性に傾くようになってきたそうだ。もともとは反体制の象徴だったはずのパンク・ロックの世界が今では縦社会となっており、先輩バンドのライブの打ち上げに後輩が行かないと「態度が悪い」と叱られる、という話には、思わず笑ってしまった。このような傾向が加速した結果、音楽業界がつまらないビジネスに成り下がってしまい、斜陽産業になってしまうのではないかと手島氏は危惧している。

多様性は、古来より人類の進歩の原動力であり、際立つ個性の排除は社会の硬直化につながる。このことが、手島氏と筆者に共通する問題意識である。本書は、アーティストの個性を生かすことの重要性にとどまらず、社会における多様性の問題や個性を活用した働き方の問題まで幅広く論じている。筆者の専門である自閉症スペクトラムやADHDなどの発達障害は、社会性のハンディがある一方で、アートなどの方面で優れた才能を示す人たちがいることが知られている。本書でも、クレイグ・ニコルズ、ゲイリー・ニューマン、スーザン・ボイルなど、インターネットなどで自身が自閉スペクトラムであることを公表している人たちについて取り上げている。最近ではわが国でも、一部の芸能人が発達障害と診断されていることを公表している。これらの人たちは、発達障害の特性があるからこそ、独創的な仕事が可能となっている。その意味で、彼らは必ずしも「障害」があるとは言えない。本書では、発達障害だけでなく、双極性障害やパーソナリティ障害の人たちのなかにも同様の可能性を秘めた人たちがいることにも言及している。

アートの業界だけでなく、他の職業においても同様である。すべての領域で均等に才能を発揮できる人などいない。ところが現代の、とくにわが国の学校や企業では、すべての業務がある程度適当にでき、協調性がある人を重用する傾向がある。一芸に秀でているけれども人づきあいが苦手な人は、きわめて生きづらい。これでは、あまりにも勿体ない。異質で多様な人たちが共存できる社会集団こそが進歩できる。そのような価値観で個々の人たちの才能を存分に生かせる社会を作っていくことは、国益にかなっていると筆者は思うのであるが、いかがだろうか？

アートに関心のある方はもとより、そうでない方にも興味深く読んでいただける本ではないかと思う。ご一読いただければ幸いです。

(信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部 本田秀夫)

